

# 子どもの育ちと学びをつなぐ 幼小連携・接続の重要性と実践について

## The importance and practice of Preschool-Elementary School-Connection in linking child development and learning

狩野 理恵子・小西 浩美

Rieko Kanou, Hiromi Konishi

### はじめに

子どもの育ちは、乳幼児期から遊びを通して育まれており、小学校に入学したからと言って突然ゼロからスタートするものではない。乳幼児期の無自覚的な学びを小学校において自覚的な学びへと連続性を保ち、子ども一人一人の生涯にわたる育ちを積み重ねていけることを願って教育は行われるものである。

ところが、子どもが小学校入学後に学校に馴染めず、落ち着かない、学習に集中できない、授業が成立しないなど、小1プロブレムと呼ばれる状況が見受けられるようになった。このような課題に対応し、子どもの発達や学びを保障するために、幼児期の教育から小学校教育への円滑な移行が求められるようになった。

2009年11月に文部科学省が実施した都道府県・市町村教育委員会に対する調査では、ほとんどの地方公共団体では幼小接続の重要性を認識しているものの、取り組みは十分とは言えず、都道府県教育委員会の77%、市町村教育委員会の80%が幼小接続のための取り組みをしていない。理由としては「接続関係を具体化することが難しい」「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」さらには「接続した教育課程の編成に積極的でない」などがあげられている。

一方で、経済学者のジェームズ・ヘックマンが1962年から開始した「ペリー就学前プロジェクト」において、非認知能力を育む幼児教育の重要性が明らかにされた。この研究を受け、日本においても質の高い幼児教育を保障し、小学校教育へつなげていこうという考えが重要視されるようになり、教育要領や学習指導要領等の改訂の一つのキーとなった。

2017年に、新しい時代の教育の実現に向けて「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、3要領・指針）が同時改訂（改定）され、3歳以上にお

ける教育のねらいと内容の整合性が図られた。加えて、改訂（改定）の中では、幼児教育を行う施設が共有すべき事項として「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。

更に3要領・指針においては「小学校以降の生活や学習の基盤につながることを意識して」「幼稚園教育において生まれた資質・能力を踏まえて、小学校教育が円滑に行われるよう」<sup>1)</sup> という文言が明記され、同様に2017年告示の「小学校学習指導要領」にも「幼児期の教育の基礎の上に、中学校以降の教育や生涯にわたる学習のつながりを見通しながら、児童の学習の在り方を展望していくために広く活用されるものとなることを期待して、ここに小学校学習指導要領を定める」とあり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して生まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し（後略）」<sup>2)</sup> ということが示された。

3要領・指針及び「小学校学習指導要領」において、より一層の幼児期の教育と小学校教育の接続を図ることが明示され、「幼児期の教育において生まれた学びの芽生え」を「小学校教育における自覚的な学び」へとつなげる「接続カリキュラム」を作成し、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることが求められた。

加えて「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」により、2022年3月には「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」が示され、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」と称し、育ちと学びの連続性が重要視されたのである。

このような現状に基づき、幼児教育に長年携わってきた筆者の実践から、幼小の連携・接続について考察する。

## 幼児教育と小学校教育の比較

### 幼児教育小学校教育の特徴

まず、幼稚園等の教育・保育と小学校教育の比較をしてみたい。

幼稚園と小学校は学校教育法第1条で規定され、根拠法令は同一である。また、幼稚園の目的は、学校教育法第22条に「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するものとする」と示され、小学校は学校教育法第29条において「心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基本的なものを施すこと」と定められている。表現方法に違いがあるものの、教育の理念は、連続性・一貫性に基づいていることに留意したい。

ところが現実には教育の特徴や方法などが大きく異なっているのである。

幼児期の教育は方向目標かつ経験カリキュラムである。北野は「乳幼児期の教育は、経験主義的であり、目的志向型ではなく、子どもの心（好奇心・探究心・憧れ）を起点とし、感情や感覚を働かせて、リアリティのある経験を通じて育ち学ぶ教育です。カリキュラムは子どもとの相互作用の

中で臨機応変に改変しながら開発されています」<sup>3)</sup>と述べているように、幼児期の教育は遊びが中心である。子どもたちは自分の興味関心に基づいて遊び、子どもたちの興味や関心、育ちを考慮して保育者が環境を設定していく。

一方、小学校以降は到達目標であり、教科カリキュラムである。めあてに向かって学習をし、理解できたかどうかという点で評価をされることとなる。各教科等から構成される時間割があり、チャイムによって時間が区切られている。また、教科書があり、より効果的に学ぶことができるように手順や教材が決まっいて、系統的な教育である。一日の流れや、集団とのかかわりなども異なっている。このように両者には、教育の在り方に大きな違いがあることがわかる。

就学前の子どもたちはそれぞれの施設において最年長児である。年齢の低い子どもたちの世話をしたり、園において憧れの存在でもあり、年長児として責任をもって活躍したりする。子どもたちは自信や大きな希望をもって小学校に入学するが、最年少となり、世話をされる側になる。また、様々な園・所から入学してくるために経験の差があり、「ゼロからのスタート」として、基本的な生活習慣をはじめ、授業だけでなく、給食や掃除などについても赤ちゃん扱いをされるなど世話をされる側になる。幼児期に培った意欲や自信などが発揮されず、教師の話を45分間座って聞くという生活も余儀なくされる。

教育の方法も大きく異なっている。幼児期の教育は、幼児期にふさわしい生活の中で、環境を通して行い、遊びを通して総合的な指導であり、一人一人の発達の特性に応じた指導が基本となる。「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」といった五つの領域はあるが、子どもの発達の側面を示したもので、具体的な活動を通して総合的に指導されなければならないものである。そのため、小学校の国語や算数など科目ごとの教科とは性質が大きく異なっている。

### 「遊び」の捉え方の違い

幼児期の教育では、「幼稚園教育要領」に「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」<sup>4)</sup>と示されている。「保育所保育指針解説」では「遊びはそれ自体が目的となっていく活動であり、遊びにおいては何よりも「今」を十分に楽しむことが重要である。子どもは時がたつのも忘れ、心や体を動かして夢中になって遊び、充実感を味わう。そうした遊びの経験における満足感や達成感、時には疑問や葛藤が、さらに自発的に身のまわりの環境にかかわろうとする意欲や態度の源となる」<sup>5)</sup>とある。幼児が「やってみたい」「楽しい」「面白い」「不思議だな」などと心を揺り動かし、興味をもって自ら人やものにかかわることが遊びであるといえる。そのため、乳幼児期の教育・保育は「遊びを通しての総合的な指導」とし、遊びの中で「幼児教育において育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が育まれていく。いわゆる乳幼児にとっては遊びこそが学びなのである。

一方、小学校における遊びは、授業と授業の切り替えのための休み時間である。このように「遊び」の考え方が大きく異なっている。

## 「指導」の捉え方の違い

一般的に「指導」というと教え導くことであり、教師が子どもに対して一方的に知識や技能などを与える行為である。

ところが幼児教育における「指導」は「園生活の全体を通して幼児の発達の実情を把握して一人一人の幼児の特性や発達の課題を捉え、幼児の行動や発見、努力、工夫、感動などを温かく受け止めて認めたり、共感したり、励ましたりして心を通わせ、幼児の生活の流れや発達などに即した具体的なねらいや内容にふさわしい環境を作り出し、幼児の展開する活動に対して必要な助言・指示・承認・共感・励ましなど教師が行う全て」<sup>6)</sup>と示されている。

以上のように幼児期の教育と小学校以降の教育では「教育」の捉え方、方法等が大幅に異なっているのである。

子どもたちの生活は小学校入学を機会に、大きく変化する。この変化を乗り越えられるように、そして子どもたちの育ちを途切れさせないために、保育者と小学校の教師がそれぞれの教育の違いを知り、期待する子ども像を共有し、幼児期にどのような育ちをしてきたのか、小学校以降の教育にどのようにつなげていくのかについて、互いの教育課程を見直して子どもたちの成長を支えることが求められているのである。その方法の一つとして保育者と小学校教師が遊びや学びのプロセスを理解し合い、「接続カリキュラム」を作成し、円滑な接続をすることが重要であると考えられる。

### 幼小連携接続に関する実践事例

2017年に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の整合性が図られ、小学校学習指導要領にも幼児期の教育との接続について記載され、2022年には幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きが示されるなど、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続がますます重要になってきた。そこで筆者の実践を振り返ってみる。

#### 事例1 A幼稚園とB小学校の交流連携に関する実践事例

筆者がA幼稚園において2012年度より2015年度まで勤務していた時の事例である。

A幼稚園とB小学校は同一敷地内にあることから、移動に時間を取られないという利点を生かし、無理のない交流・連携になるように心がけることとした。子どもも教職員も行き来がしやすいため、お互いの情報交流もしやすく、小学校のグラウンドや体育館をはじめ、ものの貸し借りをすることも頻繁にできるという好条件であった。そこで円滑な接続を目指し、小学校との交流計画(表1)を作成し、小学生と幼稚園児の交流や教職員間の連携を模索し、実践を積み重ねた。

A幼稚園とB小学校は交流・連携のための行事としてわざわざ計画するのではなく、クリーン活動や図書委員による読み聞かせなどにおいては、小学校では休み時間を利用して無理なく活動することができ、回を重ねるうちに幼児と小学生が仲良くなり、憧れや思いやりの気持ちなどが芽生える機会となっていった。

就学前には、小学校の教務主任等が出前授業として幼稚園を訪れ、遊びを交えながら「1年生ごっこ」をすることで、小学校入学を期待できるように進めた。年長児もワクワクしながら出前授業に参加し、早く1年生になりたいという気持ちをもって先生の話聞く姿があった。

表1 A幼稚園とB小学校の交流・連携計画<sup>7)</sup>

月	活動名	学年	ねらい	内容
6	B 小 祭 り	年長児 4.5.6 年 生	小学校のお祭りに参加し、小学生と触れ合いながら、コーナー遊びを楽しむ。	小学生の作ったコーナー遊びに参加する。 各コーナー担当の小学生と触れあう。
10	運動会	年長児 全児童	小学校の運動会に参加し、広いグラウンドで走ることを楽しむ。	小学校から招待を受け、小学校の運動会で「もうすぐ1年生」のかけっこに参加する。
12	出前授 業	年長児	小学校の生活について知り、入学を楽しみにする。	小学校の教務の先生が幼稚園で、小学校の1日についてパワーポイントで紹介をする。
12	マラソ ン大会 応援	全園児 全児童	小学生が頑張る様子を応援し、マラソンに興味をもつ。	小学校のマラソン大会で、小学生の頑張る姿を応援する。 幼稚園でのマラソンごっこのきっかけにする。
1	出前授 業 (算数)	年長児	物の数え方や数字に興味をもつ。勉強することが楽しみになる。	教務の先生による出前授業を受け、クイズ形式でものの数え方について知ったり、足し算ごっこをしたりして遊ぶ。
1	合同避 難訓練 地震・火 災	全園児 全児童	合図や指示をよく聞き、「おはしも」の約束を守り、小学生と一緒に避難する。	幼稚園で集まった後、小学校のグラウンドに避難する。小学校の先生の話聞く。
1	1年生 と交流	年長児 1年生	1年生の授業を参観し、就学を楽しみにする。	授業風景を参観し、1年生と一緒にカルタや双六等で遊ぶ。
2	出前授 業 (国語)	年長児	しりとり遊びや言葉遊びを通して文字に興味をもつ。入学への期待を膨らませる。	教務の先生の指導でしりとり遊びをしたり、ひらがな、カタカナ、漢字などいろいろな文字があることに興味をもつ。
2	交流給 食	年長児 5年生	5年生と触れ合い、やさしさを感じる。給食を楽しみ、入学を心待ちにする。	5年生とペアになり、パソコンで一緒に遊ぶ。その後ランチルームで交流しながら給食を食べる。
通 年	クリー ン活動	年長児 環境委員 (5.6年)	小学生と触れあい、一緒に掃除をする。きれいになった喜びを感じる。	小学校の昼休みの時間を利用して、月1回、小学生の環境委員と年長児がペアになり、学校周辺の清掃活動をする。
通 年	図書委 員の読 み聞か せ	全園児 図書委員 (5.6年)	小学生の読み聞かせを楽しむ。小学生に憧れや親しみの気持ちをもつ。	月2回、図書委員が絵本や紙芝居などを自分たちで選んで練習をし、幼稚園で園児に読み聞かせをする。



5年生との交流給食では、和やかな雰囲気の中で小学生と一緒に給食を食べることで、人と人とのつながりが生まれるだけでなく、小学生から給食の食べ方や片付けの仕方なども教えてもらい、給食を楽しむにできる機会となった。

様々な交流を進めるためには事前・事後の打ち合わせが大変重要である。幼小の担当教諭が中心となり、打ち合わせをすることで、お互いの教育に触れる機会にもなり、相互理解を進めるための一助となった。

### 事例2 C市保幼小連携教育推進プロジェクトによる実践事例

C市においてはC市教育委員会が中心となり、公立保育園・公立幼稚園の園長補佐と小学校の教務主任や1年生担任等で構成される「C市保幼小連携教育推進プロジェクト」を立ち上げ、幼児期の教育と小学校教育の違いや特色を話し合い、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの作成に取り組んでいる。

保幼小連携教育推進プロジェクトの会議においては、小学校と園・所の生活習慣等の違いが話題となった。例えば、園・所においては、手を洗った後、タオル掛けにつるしてある自分のタオルで手を拭くが、小学生になるとポケットに入れている自分のハンカチで手を拭くといった違いがあることに気付き、園・所において保護者の協力を得て年長児後半はハンカチをポケットに入れる習慣を身につけられるように導くということに取り組んだ。同様に服をたたむ、雑巾を絞るなど様々な点で生活の違いを出し合い、子どもが少しでも戸惑うことがないようにするためにはどうすればよいかを話し合った。幼児期の教育は決して小学校教育の前倒しではないが、子どもの発達を見通し保育者が小学校との連携を意識し配慮を行うことで、子どもの力となるよう保育の見直しを行うことにした。

さらに2014年には教育課程の中に「保幼小連携の視点」という欄を設け、「ことば」「環境」「日常」といった項目で小学校への接続を意識したアプローチカリキュラムを作成し、保育の見直しを行っている。また小学校においても幼児期の教育を踏まえたスタートカリキュラムの作成を行っているとの報告を受けた。

### 事例3 D幼稚園の取り組み

E市においては中学校区の保育所、幼稚園、中学校が目指す子ども像を共有し、F学院と称し5歳児から中学校卒業までの10年間の一貫した保育・教育を進めている。

#### 1. 学院の教育目標

- ・主体的・意欲的に学び、探求心をもち続ける子ども
- ・自分や他人の良さを認め、互いに尊重し合う子ども
- ・夢に向かって未来を切り拓くことができる子ども
- ・ふるさとへの愛と誇りをもち、地域に貢献できる子ども

#### 2. 遊びと学びをつなげる

- ・「未来を拓く学校づくり」推進事業において、大学の教員を招聘し保育や授業を公開し、F学院の育てたい非認知能力「人とつながる力」「様々なことに粘り強く挑戦する力」が、どのよ

うな遊びや生活から育成されているのかについて助言を得ながら研修を深めている。

- ・幼児教育施設の担当者と小学校の保幼小連携担当者が連携し、幼児・児童の交流活動を行っている。合同研修会において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、カリキュラムをつなげる・遊びと学びをつなげることを意識した1年生の授業作りをしたり、保幼小中で学びに向かう基となる『学びのキラリ』を作成し教育内容の理解を深めたりしている。
- ・毎水曜日を「F学院あいさつの日」とし、保幼小中が違う場所であるがあいさつを通して心がつながるようにしている。また、保幼の園児が一堂に集まり、中学校吹奏楽部の演奏を鑑賞し、保幼中の幼児と生徒が互いに音楽や心でつながる貴重な体験をしている。

### 3. 保幼小連携において大切なこと

#### ①つまずきをなくす

- ・人的、物的環境の変化の中で、つまずきやすいところを整理する。
- ・時間や場所の使い方の変化を工夫し、徐々に慣れることができるようにする。
- ・発達に課題がある子どもに対する園での支援と、小学校でできることを整理する。
- ・家庭において配慮してほしいことを幼小間で整理し、計画的に伝え、実行することを支援することで、安心でき、安定した学習環境をつなげる。

#### ②学びをつなげる

- ・遊びでも学習でも「そのねらいは何か？」を明確にする。
- ・目標は、意欲や知的好奇心を喚起する側面があることを常に意識することで、子どもにとって意味のある目標が立てられるような内容を考えることができるようにする。

#### ③接続カリキュラムの作成において

- ・保育者・教師が子どもの育ちと学びを見る視点を共有することで、カリキュラムをつなげる。
- ・幼・小がそれぞれのカリキュラムを持ち寄り、共通点や異なる点、譲れない内容はどこで、何を小学校とつなげていきたいのかなどについて協議し、接続カリキュラムを作成するとともに、そのプロセスを大切にする。
- ・「子どもは何に気づき、何を学んでいるのか」を幼小間でつなげる。
- ・子どもの内にあるものを引き出せるようなカリキュラム・マネジメントが必要。

以上のような視点をもって、交流・連携・接続に取り組んでいる。

成果としては、F学院で保幼小中10年間を見通し、一貫性のある系統的な教育をしていくことで幼児期に必要な体験や身に付けたい力が明確になってきた。

今後の課題としては、幼児主体の活動、遊びを重視し教師間で語り合い高め合いながら幼児教育の質の向上を図り、ふるさと未来を担う子ども達の限りない成長を願い、「質の高い学力」、「豊かな心」、「健全な心身」等の「幸せに生きる力」を育むために、家庭、地域社会と一体となった学院教育を進めていくことが必要である。

#### 事例4 G幼稚園とH小学校の接続カリキュラム作成に向けての実践事例

筆者は京都府幼児教育アドバイザーとして、G幼稚園とH小学校における接続カリキュラムについて関わる事ができた。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため行った緊急事態宣言や休校措置により、G幼稚園とH小学校の子ども同士の交流がままならないことから、現状下においてできることを模索した結果、接続カリキュラムの作成に着手することとなった。

まずはG幼稚園が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、年長児の12月から3月の姿を予測して接続カリキュラムの前半案を作成し、H小学校に提案をした。それを受け、H小学校は1年生入学当初の姿を想定しながら、小学校側の視点で接続カリキュラムの後半案を作成することとした。

G幼稚園とH小学校の接続カリキュラムの作成に当たっては、小学校の教務主任や1年生担任と、幼稚園の接続カリキュラム推進担当や年長担任が協議し合い、お互いの教育を尊重しつつ、H小学校の目指す子ども像（挑戦・努力・絆・笑顔）に結び付けるための接続カリキュラムを作成した。更なる改善を目指し、公開保育や公開授業を行うなど教職員間で協議・検討をしている。

#### 考 察

教育の一貫性・継続性を重視し、子どもの育ちと学びをつなぐという視点で幼小連携・接続は重要な課題である。ところが、教育はすぐに効果を得られないことに加え、到達目標を重視する小学校と、方向目標で教育を進める園との間に、連携に関する課題や連携の必要性に対する意識の違いがあり、具体的にどう改善してよいかかわからないといった状況があるように思われる。

事例1のA幼稚園は園児数の減少から休園を余儀なくされ、せっかく作成した交流・連携計画が継続できない状態になってしまった。また、事例4では小学校の管理職や担任が変わることで、接続カリキュラムの改善が停滞傾向となっていると聞く。

事例2や3のように行政も参加し、プロジェクトチームなど組織的・継続的な取り組みを行い、子どもの育ちを中心に捉え、何をどのようにつなげていくのかを明確にし、園や小学校の教職員が相互理解し、実践と研究を積み重ねていくことが必要ではないかと考える。子どもの育ちや学びを継続し、一人一人の可能性が発揮され、子どもが学ぶことの喜びや幸せを感じるような質の高い教育の保障を、持続可能な体制の基で確固なるものにする必要があると考える。

#### おわりに

京都府では幼児教育推進のための拠点として、2020年に京都府幼児教育センターを開設した。筆者は幼児教育センターのアドバイザーでもあり、公私立の様々な就学前施設を訪問し助言をする機会を得ている。筆者が園内研修等に参加し各園の保育を参観すると、3要領・指針の整合性が図られたにもかかわらず、園の独自性が重んじられ方針や保育の方法、内容は多種多様であることが感じられる。小学校との接続を考える大前提として、就学前施設が3要領・指針に基づき、遊びを中



心とし子どもの主体性を尊重した保育や、環境を通して行う点など基本的な部分について共通理解し、地域ごとに期待される子ども像を共有し、保育の質の向上を目指して学びあうことが必要ではないかと考える。その上で、小学校との接続について考えたい。

また、2022年に「保幼小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」が示されて以来、京都府幼児教育センターには幼小接続に関する講演の依頼が急増した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について解説し、小学校においてどう接続することが望ましいのかについて小学校の先生方と話す機会が増えた。ここでは、教育の違いを解析し、それぞれがもつ文化や教育方法等の違いについて解説をしているが、小学校の先生からは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を到達目標として捉えたり、評価の対象として活用できないかという質問があったりする。また、複数の園・所から入学してくるために経験値が異なり、どうしても「0からのスタート」として一方的に指導するしかないというような意見も聞かれた。このようなことから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基本に捉え、子どもの育ちとお互いの教育の相互理解の必要性を強く感じている。保育者と小学校教師が接続カリキュラムの作成をきっかけに、どちらかの教育にあわせるのではなく、双方の教育の違いを知り、子どもが「どのように育ってきたのか」「どのように育っていくのか」について考察し、語り合い、理解しようと努めることが大変重要であると考ええる。

幼児期の「学びの芽生え」を活かし「自覚的な学び」となるように、小学校では合科的・関連的な指導をすることで、子どもの不安や緊張を解消し、育ちや学びの連続性を保障していくことが必要であると考ええる。そのためにも保育者と小学校教師がチームとなり公開保育や公開授業、合同研修等を持ち、期待する子ども像や育ちと学びのプロセスを明らかにし、切れ目のない成長を意識し組織的に接続することが必要であると考ええる。

## 引用文献

- 1) 文部科学省. (2018). *幼稚園教育要領解説平成30年3月*：フレーベル館 p.90.
- 2) 文部科学省. (2018). *小学校学習指導要領(平成29年告示)解説*：東洋館出版社 p.73.
- 3) 無藤 隆. (2018). *幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿*：東洋館出版社 p.20.
- 4) 文部科学省. (2018). *幼稚園教育要領解説平成30年3月*：フレーベル館 p.26.
- 5) 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説平成30年3月*：フレーベル館 p.23.
- 6) 文部科学省. (2018). *幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開令和3年2月*：チャイルド本社 p.10-11.
- 7) 八幡市立八幡第二幼稚園. (2014). *平成25・26年度京都府公立幼稚園教育研究会研究指定園 研究のあゆみ* p.48-49.

## 参考文献

- ・ 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議. (2010). *幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告)*: 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続に関する調査研究協力者会議.
- ・ 文部科学省. (2022). *保幼小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)*.
- ・ 文部科学省. (2022). *初等教育資料 Jul. 2022 No1022*: 東洋館出版社.
- ・ お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校編. (2006). *子どもの学びをつなぐー幼稚園・小学校の教師で作った接続カリキュラムー*: 東洋館出版社.
- ・ 八幡市立幼稚園. (2012). *5歳児教育課程 (八幡市立保幼小連携教育プロジェクト作成成分含む)*.
- ・ 宮津学院. (2021). *宮津学院保幼小接続カリキュラム*.
- ・ 宇治市立木幡幼稚園・木幡小学校. (2018). *令和2年度木幡幼稚園・木幡小学校接続カリキュラム*.
- ・ 福井県幼児教育支援センター. (2019). *学びをつなぐ希望のバトンカリキュラムー学びに向かう力を発揮するー*.
- ・ 社団法人全国幼児教育研究協会編. (2006). *学びと発達の連続性ー幼小接続の課題と展望ー*: チャイルド本社.
- ・ 文部科学省国立政策研究所教育課程研究センター編. (2018). *発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き*: 学事出版株式会社.